

第30期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第8回 平成25年10月28日(月)実施		
会場	市役所白山浦庁舎1号棟2階会議室	傍聴人	0人
会議内容	<p>1. 開会</p> <p>2. 報告事項</p> <p>(1) 平成25年度新任社会教育委員等研修会参加報告(佐藤委員)</p> <p>3. 協議事項</p> <p>(1) 「生涯学習市民意識調査」分析結果について</p> <p>(2) 第1回小委員会報告</p> <p>(3) 地域の人材の育成等についての事例発表</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニティ・コーディネーター養成講座について 亀田地区公民館長</li> <li>・地域をつなぐ活動について 小須戸小学校区コミュニティ協議会 事務局長 小須戸小学校・小須戸中学校地域教育コーディネーター 村井 豊 氏</li> </ul> <p>(4) 今期報告書骨子と新潟市の生涯学習に必要な視点について</p> <p>4. その他</p> <p>5. 閉会</p>		
出席者	<p>【社会教育委員】</p> <p>相庭和彦 川上光子 雲尾周 齊川豊 佐藤貞子 中村恵子 長谷川克弥</p> <p>【事務局】</p> <p>斎藤教育次長 三保生涯学習センター所長 山川中央図書館長 鈴木課長(生涯学習課) 河内課長(地域と学校ふれあい推進課) 高橋館長(中央公民館) 丸山事業係長(中央公民館) 伊藤課長補佐(生涯学習課) 原係長(生涯学習課) 相崎主査(生涯学習課)</p>		
会議録			
<p><b>1. 開会</b></p> <p>(相庭議長)</p> <p>本日の出席について報告をお願いいたします。</p> <p>(事務局)</p> <p>本日は、宇賀田委員、長谷川美香委員、原委員、松木委員の4名が欠席でございます。新潟市社会教育委員の会議運営規則第9条に定める開催に必要な人数を満たしていることを報告します。また、本日の会議につきまして、傍聴の定員を5人として周知しましたが、傍聴希望はございませんでした。</p> <p><b>2. 報告事項</b></p> <p>(1) 平成25年度新任社会教育委員等研修会参加報告</p> <p>(相庭議長)</p> <p>佐藤委員から報告をお願いいたします。</p> <p>(佐藤委員)</p> <p>7月に行かせていただきました。報告書はご覧のとおりなのですが、全体的に見て、新潟県内のさまざまな市町村からいらっしゃった方々とお話をする機会があったのですが、皆さんが比較的ネガティブに考えていらっしゃって、年に2回、3回の会議のところ駆けこあって、公募で手を挙げた若い女性も何人かいらっしゃったのですが、その方たちは、私たちは一体何をするために社</p>			

### 第30期新潟市社会教育委員会議

会教育委員になったのだろうというくらい、彼女の所属する市ではかなり制約があるらしく、余計なことを言うなど言われていて、承認しますか、はい、承認しますとしか言えないと。社会教育委員というのは一体何をやる立場なのかがいまだに分らないままであるという、斬新な意見を聞きました。

たまたま帰りのバスで一緒になった上越市の女性が、図書を専門にやってこられた方なのですが、帰りのバスの中で延々と強い不満を口にしていっぱいしました。この会議も全部自腹だと。駅に着くまで強い不満をおっしゃっていたのですが、こういう方をうまく活かしていけばいいのではないかと思いました。ざっくりとした感想としてはそのような感じですが、新潟市は私一人だったので、新潟市ではこんな感じですよというお話をさせてもらったら、随分回数があるのですね、何をやるのですかと聞かれました。

(相庭議長)

ただいまのご報告でございますが、ご質問、ご意見はございませんでしょうか。

(雲尾委員)

上越市はたしか委員が36人いるのです。14市町村合併をしていますけれども、旧市の人数が少し多いので、その倍で36人の委員がいます。地域代表的な委員が多いことは多いのですけれども、活動でうんぬんかんぬんということなのでしょうね。先日の公民館大会などでも、公民館運営審議委員、社会教育委員等の話をどうするかということが、私どものテーマではあったのです。そういう点で、うまく回っていないというのが公民館の劇には表れていたのではないかと思います。

(相庭議長)

実は私も社会教育委員連合会の会議に参加してきて、「その他」のところで、同じように大橋会長から出されたのが、11月11日の中央教育審議会に呼ばれて、教育委員会の制度改正をやるという話があったのです。そのときに、社会教育委員の役割というものを聞きたいという話なのです。どうも話の内容は、大橋さんの「感想」ということで紹介してくれたのですけれども、新しい教育委員会というのは、首長の諮問機関になるだろうと。そうすると、社会教育委員というものは必要なくなるのではないかという危機意識が強くあって、10分から15分くらいのヒアリングなので、11月11日は、どうして必要なかということ強く訴えないといけないということで、皆さんは平場の議論をしてほしいということでやったのですけれども、前提に社会教育委員や教育委員会というものをつぶそうというある政党の主張というのは、実質として機能していないという根拠を持っているのだと言っていました。

今、議論が起こってきている背景を細かく見るということをやったときに、佐藤さんが参加したように、社会教育委員が何をしているか分からないというのは、恐らくその委員だけの問題ではなくて、私の知っている範囲では、かなり日本の中に多くあると。そうすると、そういう会をいつまでも持ってもしょうがないのではないかという主張が政治的レベルで出てくるのも無理からぬ話なのではないかという議論はありました。

### 3. 協議事項

#### (1) 「生涯学習市民意識調査」分析結果について

これは、私と雲尾副議長でやるということになっていますので、資料1を見てください。私のほうが、この間作った調査のうち、生涯学習活動への関わりの前半の部分を担当して、後半は雲尾副議長が、社会活動への関わりの部分を分析するというのでございます。私から、資料1-1、雲尾副議長からは資料1-2ということでございます。

私から簡単にアンケートを読んで、意見をまとめてみました。まず、生涯学習への関わりという部分ですけれども、生涯学習への関わりの有無、その内容・方法、その成果の活用について調査したものとことです。見ますと、新潟市の場合は46.2パーセントで過半数にはいかないまでも、37.5パーセントが新潟県の平均ですから、高いです。読んでいくと、「スポーツ・レクリエーション」、「趣味、娯楽」が高くて、「職業上必要なもの」が高いです。「地域社会の理解や振興」、「社会問題、

### 第30期新潟市社会教育委員会議

社会変化への対応」というふうに、地域社会や社会問題に関する関心は低くなって出ています。

ながめてみますと、生涯学習を行う動機などは、本来、年齢別に分けてみていくというのが課せられた課題だったのですが、全体をながめて見ていくと、おもしろい結論が出たので、まず、全体を見ていきたいと思えます。問4はそのとおりです。問6を見てもらうと、生涯学習活動を行う目的というところを見ると、「体力づくり」や「生きがい」、「趣味」というのが高いのです。そのかわり、「地域との関わりを深める」とか、「地域社会の活動に役立つ」というのが低いのです。同じように、生涯学習の方法を見ると、「自主サークル、グループ活動」に次いで、「本や新聞、テレビ、ラジオなどの利用」というのが高いのです。けれども、「コミュニティ協議会やPTAなど地域団体に関わってくるもの」になると軒並み低くなります。同じようなことが、問8を見ても分かるのですが、身につけた知識の活用を見てみますと、「自分の趣味の活動」や「自分の健康づくり」というのはすごく高く、「ボランティア」、「地域での活動」が低くなり、「学習、スポーツ、文化の指導者」になるとか、「学校を支援する」というのは極端に減り、挙げ句の果てに「活かしていない」というのも出てくると。

学習そのものを行っていないという理由も聞いているのですけれども、それは、「仕事が忙しくて時間がない」、「きっかけがつかめない」と。「情報がない」とか、「学習を行う時間が合わない」となっています。生涯学習活動に関する今後の動向というところを見ると、「生涯学習活動を今後続けたい」とか、「行ないたいと思う」とかというものについては高いのです。だけれども、その中身を見ると、「趣味、娯楽」、「レクリエーション」、「健康管理」、「家庭生活の向上」と、自分にすごく近い課題は高く、「社会の理解」、「社会問題や社会の変化についての対応」、「PTAやコミュニティの講座」などは極端に減るのです。

同じように、問13で、入手したい情報を見るとどうなるかという、「講座や催し物などの案内」がすごく高く、「講座にかかる費用」となってくると、下がったとしても35.6パーセントと。これに対して、「学習相談」や社会性にかかわる部分、自分自身が関わってくる部分になると、がたっと低くなります。施策への要望というのは、「施設であるとか、講座を増やしてほしい」というのは高いのですが、「リーダーを育成してほしい」とか、「ボランティア活動を支援するようなことをやってほしい」というのは低いのです。これはどう見るかというのがその下なのですから、以上のような結果を見ると、生涯学習活動が市民一人一人の学習要求に根差し展開がされているということは読み取れるのです。だから、一人一人の学習要求がしっかりと出てきているのですよということは分かるのです。同時に、従来の公民館での学習グループ主体の学習活動から個々の学習活動へと学習形式を変化させている傾向が強いことが分かります。だから、公民館で学習グループを作って、その学習グループを中心とした社会教育団体が活動していく。それについては、がたがたしてしまっていて、個人的に勉強するのだということがすごく高いのです。この点は、社会教育と異なって、生涯学習というのが、個人の学習要求・学習活動を基底に展開される性格を強く有していることからすると分かるのですけれども、生涯学習施策を地域リーダーの育成や「まちおこし」、「まちづくり」に関連させて展開していく場合というのは、非常に重要な課題になるだろうと。だから、地域のボランティアを作ったり、地域を興したりするということを学習活動からの成果を結びつけていくと、そう考えていくと、この関係などはかなり一ひねり、二ひねり必要な施策になるよう打たなければいけないかと思えます。

回答から分かるのとおり、市民は市行政に対して、学習施設や講座の情報のより効率的な提供を期待しているけれども、その学習成果を地域に還元していくということになると関心は薄いです。だから、個別化が進んでいる、ここは少し書こうかと思ったのだけれども分からなかったのです。ということなのです。それを反映してか、個人の趣味や健康、技術の学習には関心が高いのですけれども、社会問題や地域の伝統、地域社会との関係については、学習要求が低いです。だから、伝統を残すとか、そういうことについてはものすごく低いと。社会教育は、本来、民主的で豊かな社会を形成する、市民を形成することを基礎に展開されますが、この結果を概観すると、学習を継続して、さまざまな能力を培っている市民をいかに結びつけていくかと。言い換えると市民ネットワー

### 第30期新潟市社会教育委員会議

クを作り出せるかが今後の課題となるであろうことが推察できます。

また、学習活動を行わないと回答している市民も、その理由について情報が取れない、だから、仕事が忙しくて、関心は高いのだけれども、学習活動に徹している人たちは、自分のためにどんどん出してくれと。やりたいのだけれども情報がない。だから、社会的つながりがきれてしまっているものだから、ロコミ要素が全く入らないわけです。なので、やりたいのだと、学習したいのだという要望があるのだけれども、それが掴めない。そういう状況になってくるのです。だから、生涯学習の情報ネットワークというものをどのように作って、学習情報のあり方をどう発信していくかと。今までは、市民同士でネットワークがあったから、それがぱっと発信できたのだけれども、それがうまく機能していないというように、結果から見ると取れるということです。また、学習形態というものを見ますと、学習団体に所属して学習をするということから、個人的な学習活動を展開するスタイルというのは、20代、30代が高いです。これは、インターネットの活用など、学習手法が多様化して、公民館などが学習の中心ということから、個人の生活の場へと活動の場が変化していることを裏打ちしているのです。ところが、40代が高いのです。その40代が入っているのはPTAです。中学生、高校生、あるいは小学生のPTA関係が出てくると、30代の減りが少し遅くなって、40代になって落ち着いてくるというのは、1人目の子より2人の子まで入るとPTAも慣れてくるものですから、だから大体そういった形で動く。そうすると1人目の子が二十七、八で生まれて、2人目の子が三十二、三で生まれると。そうすると、ちょうど2人目の子が高学年になってPTAの役員を押しつけられるという、数が大体合うのです。佐藤さんなどはそうではないですか、私もそうですけれども。そうするとぴったり合うのです。だから、PTAみたいなものになるとうまいこといっていて、だからやった人というのは満足度が高いのです。そう見ると、学習内容もおもしろくて、20代、30代というのは、はっきりいって職場関係の学習内容をメインとして打ち出しています。この点は、50代以降のことと異なっていて、50代以降の人になると、割とばらつきが出てくるのです。だから、このことを公民館などの社会教育事業を展開する上で、職場といいますか、スキルですよ。就職とか、職業に関するスキルというものをどのように提供するかが課題なのだろうということが読み取れました。

また、年齢別と地域別を見ていて、おもしろい傾向が幾つかあるのですけれども、例えば、中央区は公民館がすごく盛んで、かなり頑張っている事業を展開していて、割といいところだと思ったのですけれども、満足度というのはそうでもないのです。西区とか、あまり公民館が盛んではないのかなと思うところにいくと学習というのが出ていて、その辺は少し気になる場所です。まだ、細かく見ていないので分からないのですけれども。だから中央区だけがずば抜けていて、あとが少しへこむかなと思ったのですけれども、そういう形にはなっていないです。データを見ると、確かに中央区は出るのですけれども、でも施設とか、事業の提供等、その辺のアクセスを考えると、もっと出ていいはずのものがあまり出なかったのも、少し意外だなという気がしました。私のほうから以上です。

一応、私と雲尾先生の話聞いて、あとは意見交換ということになります。では、雲尾先生、よろしくお願ひします。

(雲尾委員)

資料1-2をご覧ください。年齢クロスを中心に分析していきまして、質問同士の回答のクロスはまだやっていないので、その分、少し余裕を持たせている形になっています。問15以降が社会活動になりますので、それで見っていきますと、問15あなたのお住まいの地域は住みやすいと思いますかということで、全体結果で「そう思う」が61パーセント、「そう思わない」が9パーセントなのですが、これは30代が「そうは思わない」が15.9パーセントで一番高いということです。ところが40代の「そう思う」が69.6パーセントと、これはそう思う中で一番高いので、30歳代の人是最も地域に住みやすいと思っていないのに、40代では最も逆にそうになっているという極端な差というのが不思議なところではあります。60歳を過ぎると否定的要素が激減すると。つまりそうは思わないということが一けた台になっていくという形であると。

### 第30期新潟市社会教育委員会議

問16 あなたは、お住まいの地域にどのような課題があると思いますかとか、問21 あなたが、社会活動に参加していない理由は何ですかというところから見ていくと、どうやら新潟市の場合、30代の人が一番暮らしにくいようだ。子育てが大変だということが起因するのかどうか分かりませんが、そういったことが、このところに分かります。

問16 あなたは、お住まいの地域にどのような課題があると思いますかということで、結果の多い順にはこういったことがあります。大体結果は全部同じなのですけれども、ただ、住民同士の交流を支えるという点は、年代が上がるほど高く、平均が31.7パーセントですけれども、60代が38.9パーセント、70代が36.3パーセント、80歳以上が38.6パーセントであります。この傾向は、次、高齢者に対して支えあいが少ないが、これは選択肢なのでカギ括弧をつけてもらおうと分かりやすいと思いますけれども、高齢者に対して支えあいが少ないという言葉でいうと、20代は4.3パーセントなので、恐らく20代は高齢者のことは全く見ていないだろうということは分かるわけですけれども、20代、30代の10パーセント以下のところと比べると、60代、70代、80代では、非常に高くなっていくので、当事者としては、支えあいが少ないという認識があるということです。逆に若い場合は、子育てに関連した項目が問題視されるわけで、子育てに関して支えあいが少ないということは、30代は平均の倍以上あると。子どもの居場所が少ないという点についても、20代、30代、40代という高くなるということになります。ですから、大体、傾向としては同じなのだけれども、部分的には世代によって課題のとらえ方が変わってくるということを入れておきました。

問17 あなたは、社会活動に参加していますかについては、年齢が高くなると参加率も高いということになってきます。問18の活動内容や、問19阻害要因ともあわせて考えることになってくるだろうということです。

裏にまいりまして、問18あなたが参加している社会活動は何ですかといったときに、結局、ここで社会活動に参加している人が、全体で4分の1しかいないので、激減するわけです。特に20代ですと8人とか、ほとんど統計分析の対象ではないような、全部誤差になってしまうような数字になってしまうので、これで数字が50パーセントだからどうだということは言えないので、傾向はこの辺は読み取るべきではないのですけれども、年代によって活動傾向は異なって、若い方向から高齢者に向かっていくと、最初は地域行事にかかわるのです。子どもが学校にいる世代で学校支援にかかわる活動になり、子どもが大体学校を終わり、子どもがいなくなるか、孫が入るころになると防犯・防災・交通安全にかかわる活動というようにシフトしていくということが見えてきます。問19も社会活動に参加したきっかけについても、年代的に若いほうから、学校時代の経験を通じて参加するというものから、知人や団体からお願いされたからということです。知り合いが、地域の中でより住みやすいという世代です。そして、それがさらに進むと、地域や社会をよりよくしたいからというものがきっかけとして変わってくる。個人的なものからつながりが生まれて、より高次なものに進んでいくと。社会的発達課題の分析について、青年期だけでなく、壮年期や高齢期についても取り組む必要があるのではないかとということが見てとれます。

以下、問20と問22、問23、問24の後には、本来、特記事項なしということを書いていたのですけれども、上書き保存する前の文書を送ってしまいましたので、皆さんの手元にはございません。ぶつ切りの文書で、問25とか、問26とか打ち込みかけているのですけれども、これはこの後、作成する過程では消しているのですけれども、上書き保存する前のデータを送ってしまいましたので、問25、問26は消していただいて、特記事項なしという項目を問20、問22、問23、問24につけてもらおうと、私が送りたいファイルなのです。

特記事項なしというのは、年代的な傾向とか、取り立てて素のデータを見て言えること以上のことがあまり出てきそうもないということが、その四つのことですので、それはアンケートをそのまま見てもらえばいいだろうということになります。

問21ですけれども、あなたが、社会活動に参加しない理由は何ですかといった場合に、世話を必要とする家族がいるというのは、30歳代のみ高い。これは子どもがいるということを示すわけです。そして、急がしくて時間がないという項目を見ても、これも途中で50歳だから消しかけていますけ

### 第30期新潟市社会教育委員会議

れども、全体平均が43.9パーセントですけれども、20代、30代、40代が平均以上です。半分以上の人が忙しく、時間がないといったことになっていて、やはり若い世代の大変さ、住みにくさというものがあるようどころまで、見たところでは。

(相庭議長)

分析結果について、私と雲尾副議長のものが出たのですが、その他、ご意見等いただけると、ご意見等を加味しつつ、また少し中身を書き入れていきたいと思います。まだ途中なものです、いかがでしょうか。

(中村委員)

県との比較で見ると、新潟市はすごくいいねという感じがするのですけれども、全国とかの比較とか、前回のものとかの比較というのはやらないのですか。

(相庭議長)

全国の比較というところまでは手が回らなくて、新潟県との比較はやってみたのですけれども、そんなにずれないのです。全国の比較の場合だと、全国の聞き方と若干違うところがあるので、果たして素直に比較できるかと。

(中村委員)

直接は比較できないと思いますけれども。

(相庭議長)

そこは少し考えてみたいと思っています。

(中村委員)

前回調査はいかがですか。

(相庭議長)

前回調査の比較については、正直なところ、まだ手つかずです。やっと読み切った段階なので、すみません。

ほかにいかがでしょうか。もう少し分量的に書いてもいいのでしょうか。

(事務局)

もう少し入れていただいてもかまいません。

(相庭議長)

大丈夫ですか。全体を見て書くというのであれば、すごく簡単なのですけれども、数値を入れていくと、けっこう量が入ってしまうのです。あと半分くらいに詰めてしまえば、全体の傾向というのはかけるのですけれども。

(長谷川(克)委員)

これはどのような使われ方が、今後、有効なのでしょうか。

(相庭議長)

この調査の反映形態は、この次に報告してもらいますが、雲尾先生の小委員会のほうで今、作っています、報告書に反映する予定です。

それでは、今、長谷川委員からもご質問がありましたが、小委員会の報告というほうで、議論を少し詰める必要がある内容だと思います。それでは、小委員会のほうは雲尾副議長が担当しておりますので、小委員会について、雲尾副議長からご説明願います。よろしくお願いいたします。

## (2) 第1回小委員会報告

(雲尾委員)

では、資料2をご覧ください。社会教育委員会議報告書についてというものがございます。

9月25日に小委員会を開催いたしました、その中でお話しした内容でございます。前回、こちらの会議でお話ししたところと多少変わってきたのは、4、5の部分で、生涯学習市民意識調査を3でまとめて、今、長谷川委員の質問にもあった中でいうと、ここに位置づくわけですけれども、その後、それからどういう施策を出してくるかといったときに、社会教育委員会議で話された内容等

### 第30期新潟市社会教育委員会議

を課題に挙げていく中で、こういったところにある項目のようなことが課題だろうというような話をする中で、生涯学習市民意識調査で量の調査はできているけれども、やはり質の調査が必要だろうと。こういった内容のことを詳しく見ていく必要があるだろうかということで、5の課題等を基にして、4のヒアリング調査の内容は変わってきました。新しい施策として、コミュニティ・コーディネーターというものが養成されつつあって、実際、それがどういったものであろうか、どう可能性があるのかというようなこと等を話していましたが、KCC新潟情報とか、タウンにいがたというのは、社会教育、生涯学習の中で問われているものとして、広報体制がいつも問題視されているけれども、実際、世の中の人たちは、市報にいがたを読むよりは新潟情報を見ているのではないかという話がありながら、広報戦略でしょうか。そういったような、要するにタウン情報紙がどのような形で広報しているかということ等を学ぶ必要があるのではないかという観点から伺えればということです。そちらのほうにも、生涯学習情報に関連する情報はたくさん載っていますので、その辺をお伺いしたいということです。

それから、従来の社会教育、生涯学習の形態から、さらにいろいろ変わってきていて、新しい動きとして、やはり企業の社会貢献、地域の中に根づいてくるような中でいうと、イオン青山店にはコミュニティスペースがあって、そこにコミュニティ協議会の事務局も使わせてもらったりしているようなスペース、ホールがありまして、そこで例えば、携帯電話の使い方みたいな講演もあったり、そういったことがいろいろあるのです。ですから、そのような形で、企業が地域に貢献している例としてつながってくるだろうということで、そこでお話しができればと思います。あるいは、NPOは、新しい地域社会の中で、さまざまな活動の担い手になっている中で、特に新潟NPO協会のようなところがどう活動しているのかとか、それから特に教育関係で言うと、みらいずworksのような、新しい形の活動。まだ、NPO法人になっていなくて準備中ではありますが、前回の政令市社会教育委員会にもご協力いただいたところですので、そういったような形とか、あるいは市社会福祉協議会、ボランティアという、社会福祉協議会というものが中心になっていて、ボランティアの養成講座とか、要するに生涯学習の一環としての活動としては、大きな部局であるわけですが、今まで全く連携が取れていない部分もございますので、実際どうなのかということ。そういったような形のヒアリング調査を積み重ねて、質の部分を補っていて、課題についての方向性とそろえていこうというような形が、小委員会での話でありました。

それらから、第2章です。いろいろな視点が出てくると。そういったところまで、前回の会議では決まったところです。

(相庭議長)

小委員会の委員の方々はいろいろ議論して進めていって、ご苦労さまでございます。さて、その中身、具体的にその一環として、今日、お話を聞くということになっています。ですので、質疑、ご意見等につきましては、これも含めて、次のところです。人材養成についての事例報告をした後に、今期の報告書骨子と新潟市の生涯学習に必要な視点についてというところで議論をしていきたいと思っています。したがって、このご意見等は、(4)の協議事項で取り上げたいと思います。

#### (3) 地域の人材の育成等についての事例発表

続きまして、(3) 地域の人材の育成についての事例報告ということで、今日は2名ほどの方々からお願いするというので、前回の会議で議論に上がりまして、コミュニティ・コーディネーター養成講座を含む地域の人材について、事例の発表をいただいて、その後、意見交換による事例研究ということで進めていきたいと考えています。

それでは、ご発表していただける方々のご紹介を、事務局よりお願いします。

(事務局)

それでは、本日、お二人の方にお願ひさせていただきました。小委員会等の中でも、具体的に活動していらっしゃる事例を、少しお聞きできないかというお話がありましたので、急遽だったのですけれども、お願ひさせていただきます、お越しいたできております。

### 第30期新潟市社会教育委員会議

1人は公民館の取り組んでおります、コミュニティ・コーディネーター養成講座の話をしていただくことになっております、亀田地区公民館の大野館長です。

(亀田地区公民館長)

大野です。よろしくお願いいたします。

(事務局)

もう一方は、小須戸地域で地域を支えるさまざまな活動をしていらっしゃいます、村井さんなのですけれども、村井さんは、小須戸小学校区のコミュニティ協議会の事務局長、それから、小須戸小学校、小須戸中学校の地域教育コーディネーターでもいらっしゃいます。村井さんから地域での取組を話していただこうと思っております。

(村井氏)

村井です。よろしくお願いいたします。

(相庭議長)

それでは、短い時間で大変申し訳ないのですけれども、15分ほどで事例発表をいただき、その後、質疑応答と意見交換ということで進めていきたいと思えます。

それでは、はじめに大野館長からお願いいたします。館長の発表時間が15分、質疑応答・意見交換が約15分以内ということで予定していますので、よろしくお願いいたします。

(亀田地区公民館長)

私は、亀田地区公民館の大野と申します。よろしくお願いいたします。コミュニティ・コーディネーター養成講座というものを平成23年から新潟市で始めました。亀田地区公民館は、平成24年、平成25年と2年間行っているところです。

お手元にあります資料は、こちらのパワーポイントの資料と平成24年、平成25年で使っております、講座のお知らせのチラシ。そのほかに、今年度、成果としてできあがりしました「まよわず迷え!？」ほか6部かわら版がございます。こちらをご覧くださいながら、ご説明をさせていただきたいと思えます。文書を読み上げますが、パワーポイントにそった形で見ていただければ、内容は確認できると思えますので、ご覧ください。

まず、最初にコミュニティ・コーディネーター養成講座ですけれども、現在、超高齢少子化社会の到来により、地域の支えあい、見守りなど、市民力を活かした地域づくりが、これまで以上に必要となっています。また、地域課題が多様化し、行政や個別の団体だけでは解決できない問題が山積していることから、行政も含め、それぞれの人材や団体間の連携が不可欠となっています。本事業では、地域課題に取り組む人材や団体及び住民同士のつなぎ役として、また今後、設置が予定されているまちづくりセンターにおいても、中核的な役割を担うこととなるコミュニティ・コーディネーターを養成し、地域課題解決への取組を支援し、地域づくりの活性化を図ることを目的としています。江南区では、亀田地区公民館と江南区役所地域課が協力し、この事業を進めてきました。平成24年は「人とつながり地域(まち)づくり」講座、平成25年度は「わがまち知りたい!プロジェクト」として、まちづくりに興味のある市民を対象として公募を行いました。

はじめにコミュニティ・コーディネーターについてですが、各地域のまちづくり活動をサポートするため、まちづくり活動を行っている人や団体及び住民同士のつなぎ役として活躍していただく方と規定しております。事業は3箇年の継続事業として、江南区では横のつながりを深め、さらにまちづくり活動が広がり、より活気あるまちとなるよう、継続して本事業を行っております。講座に応募された方は、子育てサークルの代表、地域教育コーディネーター、NPO団体の所属の方、商工会議所職員、地域の茶の間のサポーターなどとなっています。

平成24年度のチラシをご覧ください。「人とつながり地域づくり」講座として、11月から12月にかけて5回の講座として実施いたしました。第1回は「これからの地域(まち)づくりに求められるもの」をタイトルにして、講座のねらいと流れを説明し、高崎経済大学の櫻井常矢准教授から、なぜ今、地域づくりなのか。新たな地域づくりの展開、プロセスとしての地域づくり、これからの地域づくりに向けてについて講義いただきました。その後、同大学の学生からもワークショップに



### 第30期新潟市社会教育委員会議

入ってもらい、地域課題の抽出、解決方法までの話し合いのプロセスを学んでもらいました。第2回は「地域（まち）の魅力再発見！」です。案内人をつけた亀田地区のまち歩きを実施し、地域の魅力の発展と課題の抽出を行いました。第3回では「話し合いつながる」として、まち歩きで感じたことを、マップづくりを通しての振り返りと、作業を通じて参加者の交流を図りました。同じところを回ったのですが、マップの作成には、それぞれグループの個性がはっきり表れていました。第4回は、「話し合いつながる」として、第1回で行ったワークショップの内容を振り返り、地域課題に向けての解決策に対する具体的な行動策を考えました。また、自分、地域、団体それぞれが、どのようにこの行動策にかかわれるのかも考えました。第5回は「みんなで描いてみよう！コミュニティ・コーディネーターの役割」、私たちは、地域のどこに働きかけるのかと題し、第3回で作成したマップと第4回でまとめた内容を各グループから発表してもらいました。その後、櫻井准教授から講評をいただき、地域づくりのポイント、コミュニティ・コーディネーターの役割、そしてその手法についてアドバイスをいただきました。講義とワークショップ形式が主な内容でしたので、割と固い感じになってしまったかなということが、主催者の感想です。まち歩きなどでは、屋外での活動で、さまざまな発見があったと思われます。

これで、初年度、5回の講座を終了しましたが、各講座に参加した方の感想も、少し記載しております。小さくて見にくいと思いますが、紫色の部分に、この講座の第何回何々をしましたという下の部分に、少し感想を入れさせていただいておりますので、後ほどご覧ください。

それから、平成24年度は、このほかに番外編として、新年会というものを開催いたしました。目的は、講座を振り返りながら交流を深め、またコミュニティ・コーディネーターの役割、今後、学習したいことについて、話し合うというものです。事務局としては、次年度へ継続してもらいたいということがありまして、参加者のモチベーションをなるべく下げたくないということと、また自発的に活動してもらいたいと。そのためのヒントをみつけるということを考えておりました。内容は、参加者が思うコミュニティ・コーディネーターとはについて、語っていただきました。また、その中では、いろいろな人が集う場所が必要という意見もありました。そして、来年度、やってみたいことについても、意見をいただきました。

その中で出たキーワードが、まずは知ることからでした。そして、具体的には、どのような活動をやっていくかということでは、人も含んでおりますが宝探し、まち歩き、亀田商店街ちょこっと盛り上げようプロジェクト、今、行われているいろいろな活動、これは参加している皆さんの活動を知らりたいのだということでした。これを参考に、平成25年度の事業を組み立てています。

それでは、平成25年度のチラシをご覧ください。「わがまち知りたい！プロジェクト」として、実施しております。昨年度と同じく、まちづくりに興味のある人を公募しましたが、継続して受講された方が平成24年度に参加した方で11名おりました。総勢で20名ほどでしたが、半数の方が再受講ということです。講座の内容で、第1回「同志が集まれば何でもデキル！」をタイトルにして、昨年度の講座の説明、今年度の取組、コミュニティ・コーディネーターの役割、今年度の講座内容についての説明の後、アイスブレイキング、自己紹介とグループ分け、そして、グループワークを行いました。集まった方の年代の幅が、大分広がったので、それも新しい体験だったかと思えます。第2回は「プロジェクト始動！」、講義では資源発掘の方法と手順として、まち歩きのポイント、まち歩きの手順、地域資源の活かし方を学びました。まちの価値は、資源の独自の活用方法があるかどうかで決まるというアドバイスを受け、グループで目指す行動の計画づくりをいたしました。こちらさまざまな意見をうまくまとめ、自分なるべく納得できるテーマにすることも、スキルの一つだったかもしれません。第3回では、各グループの提案した①から④なのですが、これが成果品になっています、かわら版の内容になります。最初は、1番は「迷路のまち」と言われている、亀田地区の袋津という場所があるのですが、そちらのまち歩きと北方文化博物館で昼食、そして館内見学を行っています。2番目のグループは、うまいもの探しということで、老舗になるのでしょうか、昔から商売をされている沢海屋菓子店さんとか、万平菓子舗さんのご主人にインタビューをしております。3番目のグループは、古きよき地域人を探すということで、NP

### 第30期新潟市社会教育委員会議

○法人でいろいろな情報を持っている方がいらっしゃいますので、まずそこに行って、伝言ゲームのような形で、人を一人紹介していただいて、次々とその人たちのところへ行って、インタビューを行うということをやりました。4番目のグループは、江南区を拠点に個性的、魅力的な活動をしている人を知るということで、亀田市民会館からさまざまところを回りまして、これはギャラリーのほうを何店か回って作成しております。期間は6月10日から6月21日までということで、少し幅がありましたけれども、この間に皆さんで都合をつけていただいて、グループ行動をしていただきました。

続いて、第4回ですけれども、分かったことをお知らせしようということで、かわら版の作成をしました。最初に情報発信のポイントとかかわら版の作り方について講義を受け、広報とは、そしてだれに、何を伝えたいか、そして三つのデザインポイントというものヒントに作成しております。本講座以外に自発的に集まり、複数回の編集作業もしていただきました。

余談ですけれども、12ページの下の写真、一番右側になりますが、各自、各団体の情報発信として、講座室内にホワイトボードを設置し、お知らせ掲示板として伝えるスペース、チラシなどの設置スペース、そして告知タイムなどを設けて、ネットワークづくりを行っていただくという試みを行いました。これは、けっこう毎回、好評で、それぞれのネットワークの形成に非常に役立ったかなと思っています。

それから、第5回ですけれども、これはお茶を飲みながら情報交換をしようです。各グループによるかわら版の発表と、その講評を行いました。その後、講座の振り返りと今後の活動についての話し合いを行っています。発表会で行われたかわら版は、成果を情報発信しようということになりまして、まずは取材に応じてくださった方の了解を得て発行できるかどうかということを検討し、その後、A3版に印刷して、亀田地区公民館や他の施設で配付しております。かわら版を見ると、けっこう持っていつてくれる方がいらっしゃるの、ときどき様子を見ながら、増刷しています。今回、平成25年度も、この5回で講座が終了いたしました。修了者全員に対しては、修了証書というものを公民館長の名前で交付しております。

また、3か年の事業ということで、もう1年のつながりができたらいいねということで、今回、番外編を行いました。番外編では、まず事務局の考えるコミュニティ・コーディネーターの内容の確認、それから受講生との間にギャップがないのか。継続するにはどうしたらいいのかを探るため、受講した皆さんの思うところというのを聞いてみました。聞いてみますと、やはり戸惑いがあるのかなということが分かったりしましたので、話し合いまして、まずはコミュニティ・コーディネーターって固いよね。コミュニティ・コーディネーターっていろいろなものがあるけれども、何しているか分からないねというようなこともあって、では自分たちの活動を分かりやすくしようということで、名前を併記することといたしました。そして、来年度は、実際に活動の内容としては、課題解決をやってみよう。実際に体験してみようということ事務局のほうから提案させていただいたところです。活動のためのグッズとして、名刺を作ってはどうかということになって、現在、参加された皆さんのそれぞれのスキルを活かした形で、江南区つなぎ隊という名称で名刺を作るということで、今、作成中です。あとは、お手元にあります、こちらの成果品が6部ありますが、4グループに分かれたのですけれども、何か作ってみたいということで、袋津については、3部、グループが少し小さくなったのですけれども、作っていただいているところです。簡単ですけれども、コミュニティ・コーディネーターの講座について説明をさせていただきました。

(相庭議長)

ありがとうございました。イメージが湧きやすいお話だったかと思います。以上、ご報告でございますけれども、ご質問ございませんでしょうか。

(雲尾委員)

平成24年度、平成25年度とやって、参加されている方というのは、どういう傾向か、変わらず同じような方ですか。

(亀田地区公民館長)

### 第30期新潟市社会教育委員会議

そうですね。参加されている方については、こちらのほうである程度、お引きとめをしていると  
いますか、もう1年お願いしますというような方もけっこういらっしゃいますが、新たに声がけ  
したところ、興味があるから参加しようというようなことで、今まで全然そういうことをしたこ  
とがないというような方も参加いただいております。傾向としては、やっていて本当に楽しいねとい  
うことは言っていていただいておりますが、なかなかこれを人に伝えて、一緒にやりましょうねとい  
うところまではいっていないようです。

(佐藤委員)

このプロジェクトを考えるのに、企画委員というのがいらっしゃったと思うのですが、例えば、  
具体的にはどういった感じの方がいらっしゃいますか。

(亀田地区公民館長)

企画委員という形になるかどうかかなのですけれども、先ほど、紹介しましたが、今回は、私ども  
亀田地区公民館と地域課の職員と共同で作業を行うことにしましたので、その中で進め方を考えて  
います。

(佐藤委員)

一般の方はいらっしゃらないと。

(亀田地区公民館長)

そうですね。ここには入っていません。ただ、1年目の講座が終わって、2年目に入る前に、新  
年会の中で、コミュニティ・コーディネーターをこれから継続するにあたって、皆さんはどうい  
った活動ができるかとか、どのようなものがコミュニティ・コーディネーターですかということをお  
聞きして、それで自分たちはこういうものやってみたいねということで始めたのが、平成25年の  
まち歩きを通した情報発信ということになっています。

(長谷川(克)委員)

3期が終わったところで、どういう形で、どういう課題になるのかなと思ったのですけれども、  
まず昨年の講座では、チラシの中で、地域の課題の収集という形で、いろいろ見えてきたという形  
になったのですけれども、これは企画側、今回は養成講座なので、企画は行政側がやっていますよ  
ね。行政側が見た課題ですか。それとも、参加者が参加していく中で、そういった課題を自分たち  
で抽出してきているというような受け止め方でいいのですか。

(亀田地区公民館長)

どちらもあると思いますけれども、講座の中では、次期の提案の中では、亀田の商店街をちょこ  
っと盛り上げようとか、やはりまち歩きをする中では、シャッター通りのようになってきているのも見  
受けられたり、また蔵もけっこうあったのですけれども、最近少なくなったねとか、そういうこと  
を見ながら、こういったものは今までのまちからするとさびしいので、もっと活性化したいねとい  
うような課題的な部分は見えていただいたのかなと思っています。ただ、それが全部の課題というこ  
とではなくて、やはり私どもとしては、コミュニティ・コーディネーターというのは、あくまでも  
課題を持っている人たちに対してのつなぎ役として位置する方で、いろいろな情報を持っている。  
あの人のところにいけばいろいろなことを聞けるよねと。そういう人たちを育てたいと思っていま  
すので、今はいろいろなところにつながって、いろいろな分野につなげていける、ご紹介ができる。  
そういうネットワークを持った人を目指しています。受講されている方についても、あえて課題解  
決の方策をみつけるのではなくて、ヒントを与えられるような人でいいのではないかとはお話しし  
ているところです。

(長谷川(克)委員)

鶏と卵みたいな話ですが、今までの地域でも何かの役割を担ってもらう人を育むという考え方と、  
すでにネットワークをもっていて、そういった活動ができる人を発掘するという考え方があると思  
います。今回は、ネットワークを持っている人に参加いただいて、その参加者をどうつなぐかとい  
う方向性ですか。それとも、ネットワークを最初から築いてもらおうということまで視野に入れた  
事業ですか。

### 第30期新潟市社会教育委員会議

(亀田地区公民館長)

築いてもらうというところも視野に入れていきます。今回、受講された方々の住所とか、プロフィールとか、そういったものを作ってもらって、それぞれが交換し合って、何かあったときに、自分のスキルは、こういうものがありますよということも入れているので、そういったところで連絡してもらおうということも考えていますので、今回は、作っているという部分も入るのかなと思います。

(川上委員)

この講座の養成が、講座の亀田地区公民館と江南区の地域課ということが合体して、こういう講座を組まれているわけですね。そうしたときに、養成されたコミュニティ・コーディネーターという方々の立ち位置といいますか、ポジションの場所といいますか、そういったものは、公民館サイドなのでしょうか。それとも地域課のほうへ行くような形になるのでしょうか。

(亀田地区公民館長)

どちらで所管するかというような形になるかと思いますが、これはあくまでも行政が、このポジション、職業を作ることではなくて、そういう人たちを増やしていこうと。ですから、とにかく行政がやるということになると、しっかりとした名簿を作って、それに基づいて、登録をしてもらってみたい形になると思いますけれども、それは今後の課題になっているのかという気がします。これから地域課で行われると思われるまちづくりセンター、今、まだ形がはっきりしていない部分もあるのですけれども、そういったところで、だれが行っても、いろいろな話ができるとか、そういった場所にだれかいないと聞けないというようなこともありますので、そういうネットワークを持った人たちが何人か交替でそういうところに行っていただくとか、実際に働きやすい場所といいますか、働ける場所というものも、こちらのほうである程度、今後、指定していかねばだめだと思うのですけれども、まだどちらがということではなくて、今、公民館としては育成をするということが、今回の役目だと思っていますし、その活用については、地域課と一緒に考えていかないとだめだろうと思っています。

(中村委員)

抽象的な質問で申し訳ないのですが、やはり継続、発展させていくということが課題になるかと思うのですけれども、すごくいい形できていると思うのですが、いかに主体がそちらにいくようにしていかなければいけないということもあるかと思うのですけれども、そのための鍵というのは何だと思われますか。その辺の継続、発展というあたりが難しいところかなと思うのですけれども。

(亀田地区公民館長)

自主的に活動していただくということが、最終的なこちらの考え方になるかと思うのですけれども、今回、受講していただいた方々が、少しでも今のネットワークを続けていっていただくということから、広がりができるのではないかと思いますので、今回、受講された方々へのバックアップを一生懸命頑張っていきたいと思っています。

(雲尾委員)

広がりでいったときに、横越とか、曾野木はどうなのですか。亀田が中心になってしまうのですか。今回、参加したところも含めて、これからの活動の方向づけとして、どういう感じでしょうか。

(亀田地区公民館長)

今回、受講していただいている方の中には、亀田以外の方も、当然、入っていらっしゃるし、横越の方もいらっしゃいますし、あとは曾野木の方もいらっしゃいますし、区内全体でコーディネーターの養成ということをやっているわけですので、江南区全体をある程度、範囲としては考えています。ただ、講座の中では、一番動きやすい亀田ということで、今回、やりましたが、皆さんの中では、亀田はこうだけれども、ほかの地区はどうなのだろうということで、そういったところに興味もお持ちいただいています。

(齊川委員)

平成25年度第1回の参加者の感想の中に、老若男女が参加されているとありますが、先ほど、生涯学習市民意識調査の中でも、いわゆる20代の地域貢献がかなり低いという数字が挙がってきてい

### 第30期新潟市社会教育委員会議

ます。どちらの年も、平日の午後に開催ですが、そうすると、それらのネットワークを持っている方という、かなり年齢の高い方を参加対象にしているとか、なかなか若い人もと言っても入れないような時間帯なのです。その辺、いかがでしょうか。参加者は若い方もいたのでしょうか。

(亀田地区公民館長)

今回、20代から30代のはじめくらいの方が3名いらっしゃいました。内容的には、子育てサークルの方とか、江南区外の方でもIT関係といいますか、Webデザイナーとか、イラストレーターの方で、こういうまちづくりに興味があってというような話で参加していただいています。たまたま今回、そういう情報が目に入ってということだったと思うのですけれども、時間的に平日でも来られるという方が参加していただいているということです。

(齊川委員)

よく中央区などで、学生が小路を調べたり、いろいろなことをしていますけれども、そういうものは、江南区のほうには持ってきていないのですね。これは、学生がそういうことをやるというのは、それぞれの区に行ってというのは、雲尾先生、相庭先生、どうなのでしょう。

(相庭議長)

前は、社会教育ゼミで、特色を調べたりしたのですけれども、調べ方の手法とか、あるいは特徴みたいなものを学生たちが自分たちのまちをどう認識するかというだけの話なのです。そこから先は踏み込むことはないのです。今、やっているのは、中国に行って、新潟のよさをアピールするというので、新潟県というのは、どういう県なのかということをやっていますけれども、例えば、ほかに行ってアピールするというためだけですから、行政との関係はないですね。

(齊川委員)

意識されている、ネットワークうんぬんというのは全く関係ないものですね。

(相庭議長)

関係ないですね。本人たちがこれをどう見るかということ調べて、何を見てということはやっていますが。

(雲尾委員)

これに関わって、まちづくり学校の担当の方うちの大学で話しましたのですけれども、江南区には若い人、学生がいないという中でどうやっていきましょうかという話を三、四十分したことはしたのですけれども、秋葉区であったり、北区であったり、地域に大学があるところは、そこにいる人でカバーできるわけですね。ない中でどうするかといったときに、そこからうちの大学に通っている学生もおりますので、学生に、自分が生まれ育った地域でもあるから活動してもらおうということが一つの方向だろうけれども、例えば火曜日の午後は事業が丸々空いているタイミングのいい学生がいればいいわけですが、なかなかそうもいかないだろうと。学生時代に活動したとして、新潟市内に就職してくれば、そのまま地域の人材として活躍を続けてくれる可能性があるわけですが、東京に就職したりする者もけっこういますので、途切れてしまうこともあるだろうという話し合いをして、その場は終わったのです。ですから、可能性がないわけではないということです。そこをどううまく、地域から呼びかけたほうがいいのか、大学内で呼びかけたほうがいいのか、それはまだはっきりしないところであります。おそらくは両方なのでしょうけれども、そういうことを考えていく必要があるだろうとは思いますが。

(相庭議長)

お話を伺っていると、全体としてすごくいい講座で、なるほど、こうやって調べていくのかというのは社会教育の基本的なことをきちんと踏まえていると。そこまではいいのですが、調査のときに思ったのは、市民の圧倒的多数が、消費者的な参加論なのです。創造的参加論にならないわけです。政治的にもそうなのですけれども。そういったことを考えたときに、ここで育った人たちや、コーディネートして新しいグループができてくるときに、その人たちがこういうまちにしたいとか、ああいうことをやってほしいとかという声を、行政側が吸い上げて、実現できるようなプロセスが不透明なのだと思うのです。ここで一生懸命勉強して、このまちはいいところがあると。それを売

### 第30期新潟市社会教育委員会議

り込んで少しでも活性化していきたいと考えたときに、どうするのだと。新潟市の行政に提案してみようというときに、その窓口がないのです。

例えば女池っこクラブなどだと、放課後の頑張りというの見えるわけです。具体的に、ここまで頑張りましょうと。今日、小須戸の地域教育コーディネーターの発表があると思いますけれども、このようにすれば、こう返るといものがすごくはっきりしているのです。地域教育コーディネーターとコミュニティ協議会のようなものを作って、それがうまく機能しないから、補完機構のような、人材のような感じだと、創造性というか、どのようなまちをつかっていく論理にのるのかというのが見えにくいのです。恐らく、新潟市だけではなくて日本全部に言えることだと思うのですけれども、そのときに、参加型行政といったことをいわれるようになっていっているのですけれども、たしかにいろいろな市民の声を聞きますという形にはなっているのですけれども、聞いたらどうなるのだということが分からない。コミュニティ・コーディネーターをつかって、いろいろな人をつかって、横のつながりを作っていくところまではいいのだろうと思うのですが、コミュニティですから、そこからいろいろなことがあがってきますよね。その提案をどのように積み上げていたのかというのが課題になるのではないかと思います。すごくいい実践で、おもしろい実践だと思うのですが、その実践の先が分からなかったなど。

(亀田地区公民館長)

私たちが育成しているコミュニティ・コーディネーターというのは、例えばコミュニティ協議会でこういう問題があると。コミュニティ協議会の中でさまざまな団体があるのだけれども、それが一緒に活動できなかつたりしているケースもあつたりして、そういったときに困ったねという相談をしたとき、だれかに方向性を示してもらおうとヒントになって、活動がもう少しうまくいくのではないかというイメージでいるものですから、今、先生が言われたように、何かを訴えていく場がないということではないのかなと思います。

(相庭議長)

その辺は少し詰める必要があるのではないかと。私自身もよく想像できない部分がありますので。

(長谷川(克)委員)

地域の活動を主にしている方がネットワークを活かしながら、他の人たちとのネットワークをコーディネートという意味合いだと思うのですけれども、実践の中身は活動家としての課題抽出みたいなところから始まって、その中でという形になるのですけれども、何回か重ねていって、全く何もしたことがない人が受講するということはないのかもしれないのですけれども、先ほど、ネットワークを維持してもらおう、実践にという言葉はすごくいい言葉なのですけれども、活動する中身がないとネットワークというのは作りづらいですし、時間的な必然性がないですよね。講座があるから集まるという必然性があるのですけれども、それがなくなった途端、新年会だとか何かを企画しないとコミュニケーションする必然性が生まれてこない。

先ほどの名刺にしても、場所にしても、そこまで準備しても、集まってくる必然性がないと、自分たちの組織に帰ってしまうか、仕事、役割というものがつなぐだけだと、いろいろなものがいっぱいあって、そこで一つの仕事生まれれば職員にもなれるのかもしれないのですけれども、一つの違う組織に関わりネットワークを持った人が、コーディネーターという役割で、どのような形でネットワークを維持して、それを広げていくかという想像がつかない感じです。この活動からだ、まずは持っている人たちが集まってネットワークを作るという第一段階は成功しているのですけれども、その次の、維持や発展ということを考えると、基本的にはある組織に所属しているところから、それをつなぐ場だったり、役割であつたりというものがもう少し見えてこないかなと私自身は思ったのですけれども、その辺で少しお考えのところはありますか。先ほど、新年会や忘年会みたいなものも考えていらっしゃるということでしたけれども、その先の部分ですが。

(亀田地区公民館長)

私どもが初めてやっている事業でして、これが完成形だろうというところが見えていないのではないかと思います。とりあえず、2年目はこういうことをやって、3年目につなげていこうと。

### 第30期新潟市社会教育委員会議

その先はどうするかというのは、真剣に考えていかなければいけない部分だと思っていますが、今のところ考えはありません。

(相庭議長)

ありがとうございました。

まだ聞きたいことがたくさんあるかとは思いますが、続きまして、小須戸小学校区コミュニティ協議会の事務局長で、小須戸中学校地域教育コーディネーターの村井さんからの話を聞きたいと思います。

(村井氏)

みなさんこんにちは。私は本来、自営業をやっております、地元に戻って26年です。先ほど相庭先生の「生涯学習に関するアンケート調査」の低いところにすべて顔を出しています。そういった活動をやってきたものですから、小学校のPTAの役員、中学校のPTA会長、商工会専門部長、あらゆるところに顔を出してまして、多いときには10くらいのボランティアをやっていました。ようやく50歳をすぎたので、少しずつボランティア活動を減らし、現在、コミュニティ協議会の事務局長と小学校、中学校の教育コーディネーターをやらせていただいています。ほかにも商工会の役員もやっています。

今日、このような機会です。やってきた話をしたいと思います。事例を話す前に、小須戸小学校コミ協というのはどのような人口規模かを知っていただかないと、大きい規模のコミュニティ協議会もありますし、小さい規模もあります。旧小須戸町は人口1万人のまちであります。矢代田小学校と小須戸小学校があります。私たち務めている小学校区のコミュニティ協議会は小須戸小学校区管内なので、6,000人の方が在住しています。矢代田小学校区には約4,000人の方が在住しております。新潟市に合併したことによって、コミュニティ協議会を立ち上げてほしいということで、出張所から依頼がありました。その中で、ちょうどまちづくりに携わった私どもが中核となってやった関係上、お前がやれということになりまして、今、コミュニティ協議会の事務局長をやらせていただいています。小須戸小学校にはコミュニティセンターがないものですから、私はパソコンもあるものですから、そういったところで事務局をさせてもらっております。

小学校、中学校のコーディネーターのほうは、平成22年度から地域と学校ふれあい推進課のほうの、その前からやっていた学校もあるのですが、小須戸小学校、中学校同時に実施させてもらっております。その中で、小須戸小学校のほうは私ともう一人のパートナーの二人でやっておりますし、中学校のほうも、小須戸小学校区エリアから1名、矢代田小学校区エリアから1名の2名でスタートしまして、今年度、もう1名、広報活動をやっていただく女性の方も入れて3名でコーディネーターの活動を実施しております。主に、教育委員会の中で、私は生涯教育に携わった関係があるものですから、コーディネーターを引き受けるときに、最初に小学校の校長先生から、地域のことをよく分かる方を紹介してくれと。よく分かる方は何人も紹介したら、あなたがやればいいのかということで、私が引き受けることになりました。

お手元の資料の中で、小須戸小学校、中学校区は、小中連携事業で取り組もうということで、私も小学校と中学校両方兼ねていますと、これは一つの事例ですけれども、小学校のほうは地域の方から学校に協力してもらいたいという要望がけっこうあります。中学校のほうは、科目授業でやっているものですから、学校授業支援の授業科目の補助をお願いする依頼が少ないものですから、携わっていく中で、毎年、小学校3年生、4年生が「地域調べ」という学習をやっておりました。中学校も教育指導要領が変わりまして総合の時間がだいぶ減ったのですが、3年くらい前に、やはり中学校も地域学習の課題がありました。その中で、地域を調べたいと。今、亀田公民館長からありましたけれども、小須戸も公民館がしっかりしております、地域の情報をすべて集約しております。その中で、どのような人がどういう役割を持っているかということは、公民館に聞けばすぐに人を紹介してもらえるような組織づくりになっております。

この町並みについては公民館に所属していたわけではなかったのですが、新潟大学工学部出身の人が市の職員になっているのですが、小須戸のまちを調べて、修士論文で発表した内

### 第30期新潟市社会教育委員会議

容を私どもは聞かせていただきました。これはいい話だなと。先回の「水と土の芸術祭」からそういった活動を地域で広めていこうと言うことで、小須戸には町並み研究会というものがあまして、その方々から地域の皆さんに情報を発信してもらっておりました。学校のほうも地域調べをするときに、そういう方からお話をいただけないかということで、今日のパワーポイントの原稿を用意しておりますけれども、まち歩きガイド体験などをやりたいという話も出まして、町並み研究会の方から小学校の授業に出張してもらい地域のことを教えていただく。また、小学校も地域外に行つて、あらゆる小路などを地域の方から教えてもらうという感じで、小学校、中学校両方で授業を進めていました。その中で、せっかく中学生もやるのだから、中学生が勉強したことを小学生に教えたほうがいいのではないかということで、1ページ目にあります、まち歩きガイド体験を小学生にやってもらったらどうかと。今年も12月10日くらいにやる予定で、2回くらいリハーサルを兼ねて学習しているところでございます。

そういったところに実際に中学生が町屋の外観の様子説明、町屋内部の様子説明、あるいは昔の歴史、小路の説明等を、私どもはガイドブックを作っているものですから、そういうところで中学生に事前学習してもらい、さらに教えるときのコツは、小学校4年生に教えるのだから、難しいことを言ってもだめだと。やさしい言葉で簡単に教えられるようにしたほうがいいということで中学生には指導しまして、今年で3年目になります。中学校の担当の先生と打ち合わせをしますと、授業時間に取り入れられないものですから、放課後、やりたい生徒を募つて、放課後に私どもが指導に行つてお話をすると。小学校はどうしても授業時間にやりたいという要望がありまして、いつ調整して発表するかというと、中学生の担当の先生に聞きましたら、12月の第2週あたりに三年生の三者面談があると、一、二年生は授業がないので、その日を利用してやると、小学校は授業時間の五、六限にあてられるし、中学校は放課になるので、その日にあわせてまち歩きのガイドをしましょうということで、大体12月の第2週の曜日のいいときにやらせてもらっております。

その後、小学生が自分たちで地域調べしたことを発表する場があるものですから、それも中学生に聞きに行つてもらおうということで、2ページ目の一番下の、中学生に小学生が発表したものを聞いてもらうと。そうすると、中学生が、よく勉強して分かるようになりましたとか、おほめの言葉を言うという、これはシナリオなのですけれども、そういうふうにすると、小学生はまたやる気になって頑張ると。小学校4年生も中学生になったら自分たちもまち歩きガイドをしたくなつたらいいなということで、こういった形を進めております。

もう1点の3ページ目は、幼小中連携をやるということ、市の環境対策課の予算がありましたので、菜の花プロジェクトということで、ちょうど小須戸小学校、中学校、幼稚園の中間地点に空き地がだいぶ広いところがありましたので、そちらに菜の花を植えましょうと。幼稚園の時間帯、小学校の時間帯、中学校の時間帯があつて、一斉には植えられなかったのですけれども、同じ日に菜の花の種を蒔いてみんなでやりましょうということで、菜の花学校のプロジェクトに乗りまして、幼稚園の子、小学生の子、中学生の生徒が菜の花を撒いて、今年度まで活動を実施しております。それが4ページにあります。花が咲いたところを撮っていなかったのです、申し訳ないのですけれども。この菜の花も、実際に収穫しまして、4年生だったか5年生の理科の実験に菜の花を機械にかけると油がとれるのですが、その油をなめさせたり、油かすはまずいのですが、食べさせたり、そういうことを教えてくれる地域の方がいらっしゃいます。とれた油は給食センターで調理に使ってもらおうと。大体、二斗缶くらいとれると言っていました、給食センターへ出しております。

そのような中で、町屋からの地域貢献ということで、小学校、中学校でいろいろな活動をやっているのですけれども、地域の清掃活動をやる、あるいはほんの一つの町屋の活動だけなのですけれども、そのことによって、地域に及ぼす影響は大変大きくなります。今日の新潟日報の記事もだいぶたくさんコピーしてきたのですけれども、私は必ず、新潟日報に情報を事前に連絡して取材に来てくれと。このように新聞記事として出ることによって、地域の人はすごく頑張っていると思うわけです。それから出た子どもは喜びます。昨年都市景観大賞で市長に報告に行きました。子ども



### 第30期新潟市社会教育委員会議

たちが頑張ることによって、地域の皆さんも学校に対する愛着も生まれてきます。いい意味で小須戸地域の学校の社会教育における役割と地域の皆さんが学校と取り組むところがうまく進んできたのではないかと思います。

これを進めるにあたって、コーディネーターの立場というよりも、コミュニティ協議会の立場で、けっこう中心的な役割で、多分、組織的に考えると、ここまで物事は動かなかったと想うのです。私はよくいろいろな方に言うのですけれども、私は先導者となってばんばん走り出してきて、2・6・2の法則の2割の中の先頭を走ってずっとやってきました。なぜ変わったかという、地域の勉強をいろいろとしていくと、十数年間、勉強ばかりしていて活動が目には止まらなかったわけです。うちの家内から、勉強ばかりしていて、まちは全然変わらないねと、厳しいことを言われまして、お前の言うとおりでということ、6年前にアクションを起こしたら、少しずつ、地域の雰囲気、あるいは意識が変わってきて、今、町屋の商店街に2店舗できて、4月にもう1店舗できます。あのようなところを中学生が総合の時間に、もう一つ空いている町屋があって、そのガラス拭きに来てくれるわけです。そのように、中学生も巻き込んで地域の活動がうまくなってきた物ですから、これからどのように色づけをして、地域の関わり、小学校、中学校の関わりを深めていこうかという、課題は山ほどあるのですけれども、少しずつ形が動いてくると、目の色が変わってくるようになると感じましたので、今このような活動を進めております。

今日の午前中、コミュニティ・コーディネーター養成講座のお話も公民館の職員としまして、なかなかいい方法がないと。小須戸も昨年、コミュニティ・コーディネーターをやったら地域の茶の間の育成をやって、約30人が来たのだけれども、今年度はどうしたらいいだろうかということで、いろいろな協力をいただきながら、アドバイスしてきて、今年新しく店を出した2店舗を呼んで、そういった講座をやったらどうかという感じで、いろいろな視点から取り組んでいきたいと思っております。

先ほど、齊川委員が言われたように、いろいろな事業に取り組むときに、昼にやるか夜にやるかという対象ターゲットをどうするかというのは大変難しいところでして、社会教育をやる中で、私はいつも言うのですけれども、趣味の世界というのは一生懸命やるのです。ところが、それを広げていこうとする世界はすごく難しいところで、さらにそのリーダーになってくれと言われると尻込みするのです。やっていることに対してのボランティア協力というのはすごく簡単なことで、みんながいいねと言って帰ることはだれでもできることで、次なるリーダーを育成していくのがコミュニティ・コーディネーターの難しいところではないかと思ひ、私も今取り組んでいるのですけれども、あまり一生懸命やるとみんながついてこないというのだけれども、逆に、何にもやらなければもったいないということを書いて進めています。そのようなことで、現在、コーディネーターをして地域活動に取り組んでいた事例を発表させていただきました。以上です。

(相庭議長)

ありがとうございます。大変おもしろい事例だったと思います。

ただいまの発表でございますけれども、質疑、意見交換をしたいと思うのですが、ご意見あるいはご質問はございませんでしょうか。

(長谷川(克)委員)

今、小中学校の授業をご紹介いただいたのですけれども、まち全体が変わったというお話を伺った中で、基本的に授業、カリキュラムですけれども、PTAという組織だったり、それとは別に保護者のボランティアだったり、学校によっていろいろな募集の仕方をしているのですけれども、この場合の今の実態とすると、PTAというのはどちらかというと社会にかかわるところの入口みたいなところがあって、子どもがいるからしょうがないみたいな必然性のところから、いやいや入っていった中で、役割が増えていって、自分で事業をするようになっておもしろくなる人もいるしというところで、それが終わっても続く人と、終わったら最後という人もいるわけですが、その辺の関わりがかわってきたりしていますか。

(村井氏)

### 第30期新潟市社会教育委員会議

私どもコーディネーターはPTAとの関わりも当然あるのですけれども、コーディネーターだけの仕事で言わせてもらおうと、学校が、こういう人を紹介してくれないかと言ったときに、私と学校で話をしすみ分けをしよう。これは保護者の協力があったほうがいだろう、これは地域の協力があつたほうがいだろうということで、3年目になってくると、その辺のすみ分けもしっかりしてきます。小学校の保護者も地域で教育してもうおうとか、いろいろなやり方で進めています。先日終わったのですけれども、文化祭のときに、保護者がバザーで焼きそばを作ったり、フランクフルトを焼いたり、豚汁を作ったりして出すのです。それは地域の伝統で、昔、私たちの先輩の方々が、小学校の利益を上げるのだったら、親は難儀しなければだめだということを進めていたのが継続していると。最近の若い保護者はいやがっているらしいのですけれども、やれば楽しいところも出てきて、継続的にやっております。

(長谷川(克)委員)

終わってから思うのですけれども、PTAというのは、入る前は何をすところから分からないけれども、とにかく下働きみたいな、過去に先輩がやったようにバザーもしなければいけないし、野球大会もしなければならぬので、中には、「こんな事業やめてやる」といった人が出てきたりするのですけれども、PTAというのは事業に親がかかわる負担から始まります。子どもがこんなに楽しくやっていると、PTAのオリエンテーションみたいなものはないのかなと思ったのですけれども、この事業は、そこに結びつくような気がして聞いていたのですけれども、そういった場面は生まれていないのですか。

(村井氏)

私も最近、そういうことを感じてきて、私は今年51歳ですけれども、私よりも、七、八つ若くなってくると、そういう意識の保護者が多いです。事業に取り組む意義をよく説明してやらないと、嫌なことに対してやる仕事というのはすごく重荷なのです。楽しくやる仕事というのは倍楽しいのです。そういった意識づけをさせることがこれからの保護者課題ではないかと私は常に思っていて、自分の趣味で釣りに行くとすると、朝4時には起きますよね。しかし、PTAで4時といたらだれも行かないのです。そういう意識づけをしないかぎり変わらないです。楽しくやらなければならないということです。

(中村委員)

楽しそうというのが前面に出て、それで引き込まれるところがあるのではないかと考えたのですけれども、まさにやっていることがコミュニティ・コーディネーターのようなことで、立場は違いますが、やっていることはそうなのかなという気がします。町屋の事業は継続的にやっていくという形で位置づけられたのですか。

(村井氏)

学校のほうは地域学習になるので継続的に、担当の教員が鼻曲がりではないかぎり、継続します。地域の歴史などを学ぶという項目がありますので、これは一押しで。

(中村委員)

町屋の活性化というところで、コミュニティ・コーディネーターや、学校とそこがつながる可能性はありますか。先ほどコーディネーターの方とお話しされたという話があるのですけれども、それは全然関わりはないですか。

(村井氏)

学校も町屋学習をやることによって、小須戸中学校では3年生が修学旅行のとき、1年生が地域貢献活動をやることになっているので、その中で雁木清掃や町屋のガラス磨きをやりましょうということで進めておりますが、これもほぼ継続的に、よほど鼻曲がりの先生ではないかぎりやっているとします。

(中村委員)

コミュニティ・コーディネーターなどの関わりや、そのほかの、例えば商店街と広がる可能性はあるのですか。

(村井氏)

そうですね。私は今、商店街の会長をしているものですから、その辺もいろいろと提案しながら、こう仕掛けよう、ああ仕掛けようということでやりまして、今年も「水と土の芸術祭」の市民プロジェクトの予算をもらいまして、先日、中学生が作ってくれた灯籠や地域が作った灯籠を50個並べて演出したら最高に盛り上がりました。これは来年も継続的にやれと、皆さんから心強いお言葉をいただきました。いろいろな失敗もあります。しかし批判はあまり気にしないという体質なものですから。

(雲尾委員)

今、商店街というお話が出たのですけれども、ほかに、小須戸町並景観まちづくり研究会などいくつか地域の団体が協力する中で、ほかにはどのような団体があるのでしょうか。

(村井氏)

コミュニティ協議会は文化協会加盟団体、公民館活動団体に80入ってもらっていて、その中で、コミュニティ協議会を運営する中で16名の運営委員から出してもらって、その運営を話し合っているのですけれども、そういうことをやると、みんな面倒くさくなって、任せると言うので、私の思いどおりの意見を言っているのです。みんなで考えた中で提案をして、それぞれのやり方を含めてやっていますけれども、結局、お年寄りの方は面倒くさいのです。役を言いつけると、面倒くさいから、お前たちが好きにやれと言うのです。小学校や中学校のPTAの若い役員も入ってもらっていますけれども、かかわる部分だけは協力するけれども、全体の中での構想を考えるとというのは苦手な方がいらっしやるので、私以外のいい企画を持ってきた人からどんどん言ってもらって、その企画をみんなに提案して、どうだろうということでやったほうが、やる気のある人は一生懸命やってくれますので、その企画に賛同した人が協力してくれれば良いなと思っています。

(雲尾委員)

例えば老人会みたいなところが機能していて、こういった活動に参加してくれるのですか。

(村井氏)

老人会は敬老会をやりたいということでやっているのですけれども、今まで老人クラブが主体だったのですけれども、対応ができないのでコミュニティ協議会でやってくれということで、今年はコミュニティ協議会が中心となってやっています。今までの老人会のスタイルから内容を変えて、出し物なども変えたら、けっこう評判がよかったので、来年も継続的にコミュニティ協議会もやっていきますけれども、高齢者クラブ、敬老する側が敬老される年齢になってきているわけですから、そういうところも踏まえて、コミュニティ協議会の役割というのは大変だなと思っています。

(齊川委員)

お話ありがとうございます。まちづくりから始まって、子どもたちの地元愛、郷土愛をうまく育てて、何年か後には自分が育ったところを愛するということでもいいのかなと思うのですが、村井さんは中学校のコーディネーターもやっておられると。一番最初におっしゃった、矢代田小学校も同じ小須戸中学校に行くわけですね。小須戸小学校、小須戸中学校のつながりはよく分かります。矢代田小学校は、当然、小須戸中学校に行くのだけれども、どういったコーディネーター同士の話し合いをされているのですか。

(村井氏)

矢代田小学校は、3年生が商店街調べに小須戸の商店街に来るのです。そのときに、前段、町屋学習を私が15分程度、町屋の内部を全部説明して、その後、矢代田小学校のコーディネーターが、大体6店舗か7店舗くらい訪問のところをお願いして、そして商店の方々に聞き取り調査をして、先日も来ていただき、またお礼状を小学生が書いてきたときもありまして、そういう感じで、矢代田小学校ともコミュニケーションを取りながら、先ほど、新聞で見た花いっぱい運動も、小須戸は町屋をきれいにしましょうと。2日間あるので、もう1日は矢代田駅前の花を花壇に植えましょうということで、地域のひと、矢代田小学校の生徒でやるということで、一応、そういうところで2小1中なのだけれども、両方ともかみ合うように調整を取りながら、現在、進めて

います。

(齋藤教育次長)

補足します。

最初の小学校3年生の社会科の地域学習についてです。小須戸の商店街町屋を巡るということが、今回、矢代田も地域教育コーディネーターが配置されて3年目になりますけれども、初年度のときにコーディネーターをお願いして、そのような仕掛けを作ってもらって、今回、3年目ということで、先日、ちょうど文化祭のときに、矢代田小学校へ行ったら、商店街の方が子どもたちが来るのを非常に楽しみにしていると。そのためにいろいろお店の中もきれいにしたりですとか、話す内容もいろいろ工夫したりとか、そういう一つの地域の活性化につながっていくということで、非常に良かったなと思っています。

それから、先ほどの花植えについては、小須戸幼稚園、小須戸小・中学校は、本当にすぐ近いところにあるので、物理的にも近いので連携というのは非常に取りやすいのですが、矢代田は離れていますので、なかなかそういう物理的な面からいっても、連携というのは取りにくいのですが、矢代田は、コミ協は「山の手コミュニティ協議会」というのですが、そこがいろいろな活動をしよというので、矢代田駅前の花植え、それから403号線沿いの美化清掃と花植えということをやろうということで、2年前、私がいたときに、矢代田保育園と小学校と中学校が参加して始まりました。先ほど言った、中学3年生が修学旅行へ行っている間に、中学1年生の総合学習の一環でもありますので、矢代田小学校は、最初は6年生と2年生が参加して、縦の関係も異年齢交流ということも一緒にやるということで始めました。今年は、事情があって参加できなかったようではありますが、そのおかげではないですが、小学校の場合、コミュニティ協議会の花植え活動に別な形で参加したり、小学生でもできる地域貢献の活動ということで、地域のために役立つことはやっていきたいと思いますということが、少しずつですけれどもやっていけることは、矢代田の場合も、小須戸中などとも連携しています。

先ほど言った、小須戸中学校のコーディネーターは、広報の担当者が3人目というのは、実は矢代田小学校のコーディネーターでもあるので、その辺で、今は結局、コーディネーターが3校連携しているという感じになっています。だから、これからますます、いろいろ3校で、中学校、小学校を入れて連携してやる取組みが盛んになっていくのではないかと思います。

(長谷川(克)委員)

齊川先生のところはどうか。こういう新しい事業を立ち上げるときは、いつも感じますが、学校側もカリキュラムとしてかかわった先生は、そのような時ものすごくエネルギーが高くて、教育的にも素晴らしいものだと思います。それが、3年もたつと立派なカリキュラムになって、形がある程度、しっかりしてくるじゃないですか。そうして、この継続が進むと、立ち上げた人たちが転任したりして、それを受けた次世代の先生のモチベーションも当然変わってくるし、その中で子どもたちは、毎年、新たに教育されているわけです。こういういい形ができあがってくると、けっこう長い期間の事業になると思いますが、教職員のモチベーションとか、学校側自身も、あの人に頼めばいいよという、先ほどの老人会の老人と同様で、いつも同じ人、5年、10年たっても同じ人に頼んでしまって、中身はいいのだけれども、その刷新は？というような課題が経過とともに生まれてくると思います。学校では、いろいろな授業・事業が考えられてくるわけですが、そういうところのサジェスションとか、気をつけるところとか、それに対するモチベーションを上げるということは、学校現場からするとどのように受け止めているのでしょうか。

(齊川委員)

毎年、何十時間と総合型のカリキュラムの時間があって、何年生にはこういうものをとやっています。当然、地域教育コーディネーターをお願いすることはお願いしてやります。ただ、割と何年もやっていると、本当は学校サイドから直接もできるのですが、それをやっていると今度は多忙化につながるということで、必ずコーディネーターを通してお願いする。そうすると、公民館経由で受講者が来てくれる、地域経由で講師が来てくれるという意味でやっています。同じような方が来

### 第30期新潟市社会教育委員会議

くださらなくても、逆に子どもは違う。でも、ゲストティーチャーは、来て、子どもと接するという事で元気をもらうということだから、もし自分がリタイアするようだったら、必ずコーディネーターに、今年はこれでとかという、コーディネーターが別の方を探してきてくださるということで、うまくすれば循環しているというように思っています。

(長谷川(克)委員)

先生方は、

(齊川委員)

教員も、それなりに今、地域学習に力を入れている教員ばかりです。

(斎藤教育次長)

大丈夫です。先ほど、3年生の地域学習で小須戸の商店街をと考えた教員は、この春に異動して西区の小学校に行ってしまったのですけれども、矢代田は引き続きやっておりますので、その辺はいい循環ができています。

(長谷川(克)委員)

できたての事業は、関わった人たちの思いもつながっているし、いいと思うのです。これは、5年、10年、これだけ良い中身だと、多分、永く続く事業になると思うのです。

(村井氏)

今年は、視察で地域と学校ふれあい推進課を通さずに、直接長野県の飯山市が視察に来られて、先日は、静岡市のある市の職員が勉強に5人で来られて、インターネットで街並みの小中都市景観優秀賞を取ったものを調べて、直接電話が来まして、視察をお願いしたいと。11月3日は、青森の商店街が視察に来たいということで、そういった感じで、最近、視察が多くて、ありがたいような、そういったことで対応しています。

(相庭議長)

ありがとうございます。これは、本当に可能性のある話ですよ。可能性がすごく高い話で、何が味噌かという、中学生が小学生を案内するという、これが中学生のプライドというのでしょうか。すごい刺激をして、最後は、評価までしているというわけでしょう。中学生は評価されることはいっぱいしていますけれども、自分たちから後輩を指導し、そして成長していくというのを評価するという事は、中学生が尊敬される局面ですよ。

(村井氏)

昨年、もう一点おもしろかったのが、その小学生が話を聞かなかったのですよ。ガイドした女の子二人が、先生って大変だよ。こんな生徒が話している。私も、きちんと授業を聞かなきゃということで、君、よく分かったね、それだよ、それと。

(相庭議長)

絶対に成長しますよね。確実に。あともう少しおもしろいなと思ったのは、矢代田小学校が来るという話だったじゃないですか。そうしたら、これは広がると思ったのは、例えば、内野小学校とか、新潟小学校とか、そういう小学生がここへ行ってもいいわけです。それだって、横のつながりをつけてきて、それで例えば、視察が来るとやったと思ったのですけれども、そうしたら小学生を連れてきてくださいと。視察で大人が見てもしょうがないですよ。小学生に来てもらって、それを小須戸中学校の生徒たちが案内して見せると。それを大人が見ていると、このように成長するのだということが見えるので、もっと広がり可能性があると。すごく大きく展開する事業だなと思って、聞かせてもらいました。本当に勉強になりました。

すみません、時間が無いので、まだ聞きたいことがいっぱいあるのですけれども、ここでまた時間がいっぱいなので、以上をもちまして、2人の方のご報告及びご紹介を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

#### (4) 今期報告書骨子と新潟市の生涯学習に必要な視点について

発表者の方は、ここでご退席お願いいたしまして、その後、続けていきたいと思っております。では、

### 第30期新潟市社会教育委員会議

協議事項でございますが、(4) 今期報告書骨子と新潟市の生涯学習に必要な視点についてということでございます。

それでは、先ほどの市民意識調査の分析と第1回目の小委員会の報告も含めて、ご自由にご意見を聞くということになっております。いかがでしょうか。先ほどの調査報告書をベースとして、市民意識調査で雲尾先生がお話ししてくれていました資料2ということで、全体を通してご意見を伺っていききたいと思います。確認ですが、課題とすると、これからの新潟市の生涯学習の方向性についてということを中心にして、第1章、第2章ということで、ヒアリング調査にウエイトを置いたうえで、このような形で、第30期社会教育委員会議報告書を出していきたいと考えています。この報告書が出た後に、これは教育長に提出するのですよね。この報告書ができましたら、教育委員会教育長あてに提出するというところでございます。いかがでしょうか。

(長谷川(克)委員)

雲尾先生の分析の中で、そうだなと思って、改めて、世代間という課題が重要だと感じました。先ほどの社会的にかかわるといふ部分で、20代は、働くという雇用の部分で社会に関わってくるのですが、社会教育的な部分でいうと、やはり子育てにかかわった人がPTAから始まってとか、趣味的に何かのサークルに入る余裕があって、そこから派生するという感じで、世代とともにそのニーズや役割が変わってくるものだと思います。分析の中では、子どもが生まれ、幼児期から小中学校と、義務教育に進む年代の頃、社会との関わりが増えてくるようで、そのような活動範囲の広がりがみられるのではと思って拝見していました。その視点では、人口分布がピラミッド型の時代であれば、あまり注視しなくてもいいのですが、今は逆ピラミッド型の人口分布の時代になっていますので、その辺の世代の社会との関わりということでは絶対的な数の課題ということがあると思います。先ほどの老人が老人を介護するというお話がありましたが、そういった部分を社会教育として、本当は個人の自由でいろいろなものを学べばいいのですけれども、行政的あるいは政策的には、社会の仕組みからいくと、その辺はもう少し実質的な影響力を持って良い時代になったと思います。やはり社会教育とか生涯教育の計画・方針においては、その辺を意識した文言があってもいいと思うのです。そういった意味合いでは、テーマは、ここの選択肢かもしれないのですけれども、世代ごとに関わり、世代のニーズや社会に期待する役割などをどうやって具体的に表現できるかということだと思います。ただ、いろいろなものを用意したから、皆さん、好きにやっていますよというだけではなくて、個々が世代の変わり目・人生の節目において、先ほどのコーディネーターの話もそうだと思うのですけれども、一つの役割が終わった人が、その世代の変わり目で、どう次の社会の関わりにつながるかというようなもの意識した仕組みとか、その広報の仕方でも、そういった一面があると思うのです。そういったものを課題として、上手に落とし込んでいただければありがたいなと思って、拝見していました。

(相庭議長)

世代間の学習及び社会との関係性というのでしょうか。

(長谷川(克)委員)

そうですね。連携とか、関係とか、世代間の引継ぎとかです。個々が、主体に社会に関わったり、学んだりしておしまいでなく、それを上手に次の世代の課題につながっていくということが、人口分布が逆ピラミッドの時代なので、もっと意識する必要がある時代になったと思っています。

(相庭議長)

そうですね。ほかにいかがでしょうか。これからの新潟市の生涯学習の方向ですから。いかがでしょうか。

私は、やはり情報化社会というのでしょうか、参加型社会に転換してきているので、学習の成果をきちんと社会に反映できる仕組みを民間とともに作っていく必要があるという提案があるような気がするのです。それが多分、4番目のさまざまな分野における協働ということになっていくのだらうと思うのです。ですので、4番の部分を3番の公共の場の作り方ということと、2番目の発掘・養成という部分とあわせて、4番の部分を支えるような形の構想にもらえるといいなと考えま

### 第30期新潟市社会教育委員会議

す。特に、かなり深刻で、裁判であれば市民参加がいわれ、また情報化社会の中では、いろいろな知識を獲得していかないと、職場の再チャレンジもできないというような形に、社会が動いてきていますので、そういう学習をきちんと支援できる制度というものを作ってもらいたいということを提案してもらいたいと考えます。世代間の場も、実はそこに位置していくのだと思います。60歳退職の再雇用制度というシステムが出てくると。それから、70歳以上の人たちも、どちらかという退職という考え方自身が年齢差別ではないかという議論も出てきているのです。能力に関わりなく、年ですぱっと切ってしまうのは差別ではないかということは、女性解放運動でとても元気だったある人物がいるのですけれども、そういう人たちの提案の中から、その人たちが高齢化してくると。女性ではなくて、年齢差別だというように言っている人も出てきて、そういうことを踏まえ、活躍できる人たちが、自分が活躍したい場所に入っていくために、学習的な側面ではどうやって行政は支援をできていくのか、NPOとか、あるいは企業とかというところもどのように支援できるのだろうかという部分も、学習の課題だというのは、生涯学習の制度としての課題だということを入れてもらうといいなと思っています。

今期、報告するときのご意見ということで、11月8日までに宿題が出るそうでございます。事務局からお願いします。

(事務局)

今、議長からお話がありましたが、事例発表で大変貴重な意見をお聞きしまして、協議する時間が押して、まだ皆さんのほうで言いたいこともあるかと思えます。それで、お手元に今期報告書についてのご意見ということで様式を用意しましたので、今日は議長、副議長から市民意識調査の分析がありましたが、皆さんからそれ以外についても、こういったことが見てとれるとか、あるいは報告書の骨子につきましても、ご意見があるようであれば、この様式をお使いいただきまして、11月8日までにファックスまたはメールで担当のほうまでご提出いただければと思います。これらを踏まえまして、次の小委員会で報告書の草案づくりに着手していきますので、よろしくご協力をお願いいたします。

(相庭議長)

ありがとうございます。これがないと、多分、小委員会で作るほうもご苦労されるかと思えますので、委員の先生方でお気づきの点をいろいろと書いていただけたらと思います。11月8日までにファックス、ないしはメール等でお出してください。

#### 4. その他

(相庭議長)

その他に進みたいと思いますが、その他については、何かございますでしょうか。では、以上で、本日、予定しておりました協議、報告は、全部終了いたしました。

事務局にお返ししますので、よろしく申し上げます。

(事務局)

本日も、長時間、大変ご苦労さまでした。今日は、大変貴重な事例発表がありましたので、皆さん余計熱心にご審議いただいたかと思えます。

以上で、第30期社会教育委員会議第8回を終了いたします。

なお、次回は、1月20日(月)14時から、開場は、ここではなく本庁舎3階対策室1になりますので、ご注意ください。本日は、大変ご苦労さまでした。